

## 〔編集後記〕

▼日蓮教学の現代的課題を討究するということは日蓮教学の要請であり、宗門の要請でありましょうが、それはたゆまぬ努力の集積でなければなりません。室住教授の戒壇論の研究は、現代的観点からのさまざまな問題を提起されていると思います。茂田井所長の竹田日潤師への返事は、宗義大綱、及びその解説に対する疑問に答えられたもので、当然、現在の宗学の理解に對しての先生の所見もその中にふれられております。両先生が宗学の在り方に所見を述べられるのも、望月敏厚先生・執行海秀先生の相次ぐ御遷化、望月先生の宗学論（遺稿）の発表と無関係ではありません。宗学人にとっても、宗門人にとっても正しく宗学の在り方を受けとめて行かねばなりません。渡辺の宗学論回顧は諸学匠の宗学論を尋ねた次第です。

▼現宗研の少ないスタッフでは、研究も思うにまかせませんが、近代日蓮教団史の研究を継続して、今年度はさまざまな観点から問題点を討ねてみようと考え研究例会を

行ないました。△近代教団史研究▽はその発表の一部であります。中渡師の妹尾義郎論、冠師の幕末期における祖伝普及の研究、石川師の勅額奉戴論、それらの検討はやがて近代教団史の展望の中で再度吟味され、位置づけられるようになりましょう。近代教団史の検討によって、今日の宗門の在り方を反省することは、明日の宗門建設を検討するための基礎的作業でありましょうが近代教団史の史料が意外に放置されていることも問題だと思えます。宗門諸聖の御協力、とくに史料をお持ちの諸聖には是非お教えをお願いしたいと存じます。

▼この所報が宗門人のための情報交流の場となるように念じて、今回は書評をたくさんとりあげるよう計画し、現宗研スタッフが少ないので、部外の方々にも執筆をお願い致しましたが、それぞれの御事情で部内執筆のものだけ十点にとどまりました。急激な社会の変化に宗門が対応して行くためには、もっとさまざまな面から書物が紹介され、それらのもつ意見・情報等によって宗門の活動を勘案して行かねばならぬので

はないかと感じます。

(渡辺宝陽)

▼「所報」は宗門のなかであまり普及していない。配布の方法は今後検討する必要があるように思われる。現宗研の一年間の成果が結集されているのであるから、より多くの宗門諸聖の目にふれる機会が与えられることが望ましいわけである。しかしそう云っているうちに第一号は残本がなくなってしまう。そして何よりも宗外からの問い合わせや購入希望が多くなったことは喜ばしい。しかし現宗研の仕事は「学問でない」という批難と、「学者の机上の空論」という両面からの批難がある。考えてみればこういう批判は現宗研が正常に働いていることを意味するのかもしれない。

▼「所報」も三号を重ね、やっと研究所の活動が軌道に乗ってきたようである。今年ほど多くの論稿が集まったことはない。三谷顧問の「立正平和運動史」の稿は来年にまわさざるを得なかった。

▼教化研究会が軌道に乗るためにはまだ数年を要するかもしれない。宗門諸聖からの御支援を懇願申しあげます、(丸山照雄)